

連体詞「ある」の統語的位置

松本哲也

キーワード: 指示語「あの」、限定詞 (Determiner)、連体修飾の階層構造、複合名詞句、語順

要旨

連体詞「ある」の統語的位置について、神尾 (1983) は、典型的な限定詞として扱われてきた指示語「この」「その」「あの」と同じであるとしている。しかし、名詞句内における生起位置を「あの」と比較すると、両者には異なった傾向が見られ、両者を同じ統語的位置とするには問題がある。格成分を伴う、または、時制を持つ連体修飾句・節と共起する場合、「あの」がその内側・外側のどちらに生起するか任意であるのに対し、「ある」はほぼ義務的に内側である。このことから、「ある」は「あの」よりも統語的に低い(内側の)位置にあると考えなければならない。

上記の生起位置に関する一般化を検証するために、文学作品を対象とした調査を行ったところ、「ある」と「あの」の生起位置に、一般化が予測する通りの明瞭な傾向差が観察され、統語的位置についての主張が実例からも裏付けられる結果となった。

1. はじめに

連体詞「ある」の統語的位置について明示的に述べた研究は、非常に少ない。わずかに、神尾 (1983) が、「代名詞「の」に前接できない」ことを根拠として“determiner” (本稿では通例に従い「限定詞」と呼ぶ)としているくらいである*1。

「…以下で最も重要な点となる第三の特徴がある。(15)の例を観察されたい。

(15) (a)あの本はおもしろい。

*あの(の)はおもしろい。

(b)ある男がそう言った。

*ある(の)がそう言った。

…(15)に見られた現象から、次のような一般化が得られる。まず、「の」に先行して生じうるか否かによって、(11)の例(筆者補:「安いの」「日本製の」「まずいの」「あの変なの」)に用いられているような通常の修飾語句と、(15)の例に用いられている類いの語とを区別することができる。そして、前者を通常の修飾語句と呼び、後者は

決定辞 (determiner) という別個のカテゴリーに属する一群の要素とみなすのである。」

(神尾 (1983) p82・83)

神尾 (1983) の上記引用部を含む節は、「の」の特徴を手掛かりにして名詞句の内部構造を探ることを目的として書かれたものであり、引用部は、「の」単独で名詞句を形成できない」「非常に抽象的な意味の名詞には置き換わることができない」という2つの特徴に続けて挙げられた、第3の特徴についての記述である。

このうち、「ある」が「の」に前接できるもの (例えば形容詞) と同等の統語的位置にないという記述は、(概ね) その通りであると認められる。しかし、他の限定詞、特に、英語の定冠詞相当に扱われてきた指示語「この」「その」「あの」と同等であると見なすことには問題がある。

本稿では、従来の研究において典型的な限定詞として扱われてきた指示語「あの」との対比から、「ある」が限定詞よりも統語的に低い (内側の) 位置にあることを、作例および文学作品を対象とした調査の結果により示す。

なお、指示語のうちから「この」「その」ではなく「あの」を比較対象として選んだのは、「あの」には文脈指示用法がなく、同様に文脈指示用法を持たない「ある」との比較に最も適していると判断されるためである。

2. 内省判断による「ある」の生起位置

本節では、述語 (句) と共起する場合の「ある」「あの」の生起位置の違いを、作例を用いた内省判断により示す。

まず、以下の例を見られたい。

- (1) {ある／あの} 美しい婦人／美しい {?ある／(?)あの} 婦人
- (2) {ある／あの} 面白い小説／面白い {?ある／(?)あの} 小説
- (3) {ある／あの} 優秀な学者／優秀な {?ある／(?)あの} 学者
- (4) {ある／あの} 困難な事業／困難な {?ある／(?)あの} 事業
- (5) {ある／あの} 太った俳優／太った {?ある／(?)あの} 俳優
- (6) {ある／あの} 変わった男／変わった {?ある／(?)あの} 男

(1)-(6)のような格成分も時制も持たない*2 述語 (以下、便宜的に“Adj” (Adjective) と呼ぶ) の場合、「ある」「あの」ともに、述語より外側に生起する方が自然である。「あの」が Adj より内側に生起する例が自然であると判定される場合もあるが、文脈的にその名詞句が強調を受けている (音声的には「あの」の部分に強勢がある) 場合に限られる。

それに対し、時制のタを伴う述語にすると、「ある」の場合、逆に述語の外側に生起する方が不自然になり、「あの」の場合、述語より外側に生起しても不自然にならない。

- (7) {?ある／あの} 美しかった婦人 / 美しかった {(?)ある／あの} 婦人
 (8) {?ある／あの} 面白かった小説 / 面白かった {(?)ある／あの} 小説
 (9) {?ある／あの} 優秀だった学者 / 優秀だった {(?)ある／あの} 学者
 (10) {?ある／あの} 困難だった事業 / 困難だった {(?)ある／あの} 事業
 (11) {?ある／あの} 自殺した作家 / 自殺した {ある／あの} 作家
 (12) {?ある／あの} 卒業した学生 / 卒業した {ある／あの} 学生

述語の格成分が共起すると、時制の有無に関わらずさらに不自然になる。

(以下、時制を伴う述語のみのものと合わせて、便宜的に“AdjP/C” (Adjective Phrase / Adjective Clause) と呼ぶ*3)

- (13) {??ある／あの} 洋書が安い書店 / 洋書が安い {ある／あの} 書店
 (14) {??ある／あの} 私が好きな女優 / 私が好きな {ある／あの} 女優
 (15) {??ある／あの} 東京に住む友人 / 東京に住む {ある／あの} 友人

ここまでの例から、「ある」の生起位置は、以下のようにまとめることができる。

(16) 「ある」の生起位置

- a. Adj (格成分を伴わず、かつ、時制を持たない述語) と共起する場合、その外側に生起する。

[ある][Adj][名詞]

- b. AdjP/C (格成分を伴う、または、時制を持つ述語 (句/節)) と共起する場合、その内側に生起する。

[AdjP/C][ある][名詞]

これに対し、「あの」の生起位置は、以下のようにまとめることができる。

(17) 「あの」の生起位置

- a. Adj (格成分を伴わず、かつ、時制を持たない述語) と共起する場合、その外側に生起する。

[あの][Adj][名詞]

- b. AdjP/C (格成分を伴う、または、時制を持つ述語 (句/節)) と共起する場合、その内側あるいは外側に生起する。

[あの][AdjP/C][名詞] or [AdjP/C][あの][名詞]

(16) a. と(17) a. では、違反した場合の不自然さに差があるものの、「ある」と「あの」の生起位置は同じである。両者ともに [Adj] と [名詞] の間に生起できないことから、

[Adj][名詞]の結びつきの強さが、生起位置に制約を加えているのだと考えられる。

一方、(16) b. と(17) b. では、「ある」と「あの」の生起位置は異なる。述語が格成分または時制を持つ、つまりある一定のレベルより大きい構造であるとき、「あの」の生起位置は内側と外側のどちらかが任意であるのに対し、「ある」の生起位置はほぼ義務的に内側である。「あの」がAdjP/Cよりも外に出ることができるのに対し、「ある」は出ることができない。(16)の一般化が正しいならば、「ある」の統語的位置は、少なくとも、「あの」より低い(内側である)ということになる。

3. 調査から見た生起位置の傾向

前節では、内省判断により得られた「ある」の生起位置に関する一般化(16) a.b. をもとに、「ある」が「あの」より低い(内側の)統語的位置にある、と述べた。本節では、その(16)が実例の傾向となって現れること、および、その傾向が「あの」の傾向とは異なることを、文学作品を対象とした調査の結果により示す。テキストは『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』に収められている日本人作家の作品全て(67作品、一覽参照)で、作者本人が書いた部分全てを調査対象とした。

用例の収集は、テキスト検索により「ある」「或(る)」および「あの」を含む文脈を機械的に探し出し、そこから手作業で主名詞までを文脈から判断して抜き出す、という手順で行った。CD-ROMを用いているが、全てを機械で行ったわけではなく、以下で示していく数値には誤差がありうることをお断りしておく。

3. 1. 「ある」と「あの」の、生起位置の傾向差

述語(句)と共起する「ある」と「あの」の生起位置の傾向差を見るために比較を行った。比較対象は、構成素を[ある/あの]・[述語(句)]・[名詞]の3つに分析できるものだけに限定した。具体的には、共起する(連体形の)述語(句)が1つだけで、他の連体成分が共起していないものである*4*5。このように比較対象を限定したのは、[述語(句)]以外の構成要素が増えることで、生起位置に関わる要因も複雑になり、比較作業にとって不要な困難さを取り込んでしまうと判断したからである。(ただし、比較対象外とした用例が本稿中で全く考慮外ということではなく、本節で行う比較作業の対象としないだけであり、後の節で必要な用例は、適宜考察対象に含めている。)

ここで、比較対象外とした例のうち、「の」句が含まれる例について説明しておかなければならない。「の」句が含まれる場合、先に述べた構造に該当すると判断して比較対象に含めたものと、そうでないものがある。例えば、以下に示すような「の」句が主名詞の隣接位置に生起している例は、主名詞とともに一つの名詞句を形成しているとも見なせると判断し、比較対象に含めた。

(18)滑りながら、彼女も【あの】凍死者から受けた[心の衝撃]から離れ得なかった。

(石川達三)

[の句][主名詞]の意味的な結びつきが強く、引き離すことが難しい。これに対し、以下の(19)(20)のように「の」句が主名詞の非隣接位置に生起している例は、先に述べた構造より修飾句が多いことが確実である。従って、比較対象から除外した。

(19) きのうまでの、【あの】自信に満ちた顔はなく、ひどく物憂げに見えた。

(新田次郎)

(20) 今その人に自分が艶書を送るという事は【或】【他の】真面目な動機を持ってする一つ的手段にしる、余りに不調和な、恐ろしい事のような気がした。(志賀直哉)

(ただし、主名詞の非隣接位置に「の」句が生起する例のうち、「の」句が意味的には述語句の主語となっている、いわゆるガノ可変の例については、「の」句が述語句内要素とみなせると判断し、比較対象に含めた。後述する通り、これらガノ可変の「の」句を含む例については、特異な振る舞いが観察された。)

以上の処置を施して、最終的に比較作業の対象とした用例の数は、以下の通りである。

	「ある」	「あの」
全用例数	2155 例	6713 例
比較対象	201 例 (9.3%)	815 例 (12.4%)

これらの用例を、述語部の形式的特徴のみを基準として分類し、統計をとった。詳細な分析は後で行うことにして、まず、その結果を見られたい。統計は、

①述語のみ: 否定「ない」まで含む。また、「(他の成分を伴わない述語/名詞+の) ような」「~とした」など接辞と見なせるものを伴うものは全体で1述語とし、ここに含めた。

②連用成分を1つ以上伴う述語

の2つに分けて横軸とし、共起した述語句との相対的な位置から、

A. [ある/あの][述語(句)]

B. [述語(句)][ある/あの]

の2つを縦軸としてまとめた。以下の表を見られたい。

	あ る		あ の	
	A. [ある][述語(句)]	B. [述語(句)][ある]	A. [あの][述語(句)]	B. [述語(句)][あの]
①述語のみ	70 (93.3%)	5 (6.7%)	325 (95.6%)	15 (4.4%)
②連用+1以上	9 (7.1%)	117 (92.9%)	247 (52.0%)	228 (48.0%)

①の場合、「ある」「あの」ともに、Aの割合が極めて高いことが判る。(この傾向は、

(16) a. (17) a. が予測する通りである。)

しかし、②になると、「ある」の場合は割合が逆転して①とほぼ正反対の傾向になるのに対して、「あの」の場合には A B ほぼ同じ割合になる*⁶ というように、(やはり(16) a. (17) a. が予測する通り) 明瞭な傾向差が生じる。この結果から、「ある」と「あの」の振る舞いが全く異なることだけは、既に明らかである。

以下、(16)の一般化の例外があるかどうかの検討を中心に、用例をもとに考察を行う。

3. 2. 述語のみと共起する場合の例外

①の構造においては、「ある」「あの」ともに、ほとんどが[ある/あの][述語][名詞]の位置に生起することが確認された。「あの」についての分析は割愛して、以下、「ある」の、(16)の例外となる用例について検討していく。

(16)の例外となるのは、「ある」の内側に AdjP/C が生起している場合と、「ある」の外側に Adj が生起している場合である。前節では単に「述語」として形式的に分けたが、それが Adj か AdjP/C かを詳細に見ていかなければならない。

まず、「ある」の内側に AdjP/C が生起しているかどうか、つまり、共起した述語が時制のタを伴っているかどうか見ていく。①A に属する用例のうち、タを伴う用例は以下の 13 例で、そのうち(33)を除いた 12 例についてはテイルに置き換えることができ、時制のタとは認められない。

- (21) あなたが無遠慮に私の腹の中から、**【或】** 生きたものを 捕まえようという決心を見せたからです。(夏目漱石)
- (22) わたしが鬼界が島に渡ったのは、治承三年五月の末、**【或】** 曇った午過ぎです。(芥川龍之介)
- (23) **【ある】** 晴れた日の午後 (五木寛之)
- (24) **【ある】** 惚れた学生の下宿を訪れる時、わざわざフトン一組を抱えてやって来た奇妙な娘もいた。(五木寛之)
- (25) **【ある】** 晴れた日曜日、縁側に寝ころんだまま信夫はじっと空を眺めていた。(三浦綾子)
- (26) **【ある】** 曇った朝突然に…… (赤川次郎)
- (27) それは、**【或る】** 乾いた冬の午後であった。(曾野綾子)
- (28) この口にかぶ微笑と未紀のそれとのあいだに **【ある】** 共通したものがみられることにぼくは以前から気がついていた。(倉橋由美)
- (29) **【ある】** 一定した温度に達すると——たいした熱ではない、冬の日だまりほどのぬくもりだ… (村上春樹)
- (30) 私は **【或る】** 干いた屍体についている靴を取って穿いた。臭気が手と足にしみた。(大岡昇平)
- (31) 十、**【ある】** 晴れた日に (壺井 栄)

- (32) …次の絵を描く場所を捜すために、【或る】晴れた朝、私は彼女と一緒に、すこし遠いけれど、サナトリウムの方へひさしぶりで出かけてみることにした。(堀辰雄)
- (33) そのうち私は【ある】ひょっとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなかろうかという気になりました。(夏目漱石)

(33)の「ひょっとした」はテイルに置き換えられないが、時制のタと認定するには意味的に無理があり、慣用的にタ形で用いる語であるとすれば真の例外とはならない。したがって、例外は見出されなかったことになる。

次に、「ある」の外側に Adj が生起しているかどうかを見る。①B の用例は以下の 5 例である。

- (34) そうした【ある】日、斎藤山城守利政こと庄九郎は、邸内の持仏堂に赤兵衛をよんだ。(司馬遼太郎)
- (35) そうした【ある】日、光秀は、一乗谷の屋敷の一室に妻のお槇と弥平次光春をよび、…(司馬遼太郎)
- (36) 伏した【或る】者の臀部の服は破れ、骨が現われていた。私はこの無人の村に、犬と鳥のみ多い理由を知った。(大岡昇平)
- (37) 寺々の炎上が失火や類火や兵火によるものばかりで、放火の記録が残されていないのも、たとえ私のような男が古い【或る】時代にいたとしても、彼はただ息をひそめ身を隠して待っていればよかったからなのだ。(三島由紀夫)
- (38) つれづれな【ある】日、思いがけぬ訪問客が、源氏を喜ばせた。(田辺聖子)

(34)(35)は Adj と認定するには問題があるので除外するとして、(36)–(38)の 3 例が Adj で(16)の例外である。しかし、3 例とも、実例ではあるが、そもそも完全に自然とは言い難い表現であると、筆者には思われる。述語を無理に付け加えているような印象が強い。このことは、「ある」を述語の外側に移して、「或る伏した者」「或る古い時代」「あるつれづれな日」のように変えても奇妙な感じがすることからも、確認できる。つまり、真の例外ではないとする余地が大きい、と考えられる。真の例外であるとしても、この 3 例が全体に占める割合は 4.0%で、極めて少ないということが出来る。どちらにしても、(16)が例外の少ない、非常に強い傾向として確認できたことに変わりない。

3. 3. 連用成分を伴う述語句と共起した場合の例外

次に、連用成分を伴う述語句と共起した場合について見ていく。この構造において(16)の例外となるのは、「ある」の内側に AdjP/C が生起している場合である。②A に属する全 9 例を見ていく。

- (39) それから二三度、御消息を御取り交せになった後、とうとう【或】小雨の降る夜、

若殿様は私の甥を御供に召して、… (芥川龍之介)

- (40) 【或】長雨の続いた夜、平中は一人本院の侍従の局へ忍んで行った。雨は夜空が溶け落ちるように、凄まじい響を立てている。 (芥川龍之介)
- (41) それは【ある】河鹿のよく鳴く日だった。河鹿の鳴く声は街道までよく聞こえた。 (梶井基次郎)
- (42) 【或】雨風の烈しい日だった。私は戸をたてきった薄暗い家の中で退屈し切っていた。 (志賀直哉)
- (43) 私の話は感情を離れた雑談にはなり得なかった。【或】余り感じのよくない私情に即き過ぎていた。 (志賀直哉)
- (44) しかし、帰京すると、【ある】遠慮のない知人は、星にこう言った。 (星新一)
- (45) …満員電車で揺られて車内吊りのポスターをぼんやり見ているときに、私は【ある】押さえようのない懺悔の思いに襲われて全身をしめつけられるのです。 (宮本輝)
- (46) だが逢いたい気はややもするとした。そして【或る】月のいい夜、友と歩いて、いろいろ未来のことを話している時、自分は美しい声の歌をきいた。 (武者小路実篤)
- (47) たいていの場合に、語られるのは直接の体験ではなくして、むしろ【ある】社会的にできあがった感想でした。 (竹山道雄)

ここで注目されるのは、②Aに属するもののうち、(47)以外の全用例が、ガノ可変の「の」句の例ということである。連体である「の」句のうちでガノ可変の「の」句だけを考察対象に含めたのは、先に述べたとおり、主格の連用成分相当と見なしたからであり、その振る舞いも「が」と似たものになると予測していた。しかし、「が」の用例は、全て②Bに属し、分布は全く異なる。

これらの例は、「の」句を伴っている点を除けば、時制を持たず、自然な表現になることは予測通りである。しかし、「の」を「が」に替えると、いずれも許容度が下がる。「の」にはなく「が」にはあるものが許容度を下げていると考えられるのであり、両者の違いについて問題にしなければならない。

ここで仮に、表面的には主格に立つ点で同じであるとしても、連用成分として述語部とだけ関係し主名詞を要求しない「が」は、述語部の時制辞と直接関係して時制を伴い(時制句を形成し)、述語部と意味的關係を結びつつも主名詞を要求する「の」は必ずしも時制を伴わない(必ずしも時制句を形成しない)とすれば、それぞれを含む述語句の統語レベルは、時制の有無において差が生じうるということになる。このように捉えれば、ガノ可変の「が」を含む述語句と「の」を含む述語句の統語レベルの違いはAdjとAdjP/Cの違いと平行することになり、振る舞いが違うことも理解できる。

ここで、②Bにおけるガノ可変の全例を見てみよう。

- (48) じつはポオの書いた【ある】人物のようにわたしはここでわが身が独楽になった
と思ひこみ、ぶんぶんからだを振りまわしかねない状態であったが、…
(石川淳)
- (49) もっと前へ進めば、私の予期する【ある】ものが、何時か眼の前に満足に現われ
て来るだろうと思った。
(夏目漱石)
- (50) 「自分で病気に罹っていないが、気が付かないで平気であるのがあの病の特色です。
私の知った【ある】士官は、とうとうそれで遣られたが、全く嘘のような死に方
をしたんですよ。
(夏目漱石)
- (51) 私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らない【ある】ものが其所に存在し
ているとすれば、私の答が何であろうと、それが奥さんを満足させる筈がなかっ
た。そうして私は其所に私の知らない【ある】ものがあると信じていた。
(夏目漱石)
- (52) それもやはり雨の降った【或る】日の午後でした。私は赤坂のAの家へ出かけま
した。
(梶井基次郎)
- (53) そんな苦悩のつづく【ある】日、私は喫茶店に行きました。
(松本清張)
- (54) 昭和十七年の夏の初め、じっとしていても汗の滲む【ある】日の午さがり、松原
の楡脳病科病院本院の裏手、農場の一隅にある梨園の材木の上に、二人の男が腰
を下ろしていた。
(北杜夫)
- (55) 権威です。人を思いのままに動かすことのできる、【ある】もの。(井上ひさし)
- (56) それから何年か経って、山本が少将になり、中将になり、次官になったころ、山
本とは全く関係の無い【ある】酒宴の席で、「壇之浦夜合戦記」の話が出、…
(阿川弘之)
- (57) 左山は言ったが、その言葉には、彼に曾て感じたことのない【ある】素直さがあっ
た。
(井上靖)
- (58) ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春の尽きるに間のない【或る】
晩の事であった。
(夏目漱石)
- (59) 私はあなたに話す事の出来ない【ある】理由があって、他と一所にあすこへ墓参
りには行きたくないのです。
(夏目漱石)

②Aと比べると名詞句全体が長い例が多いことと、定名詞句が含まれる例が多いこと
が目立つ。その長さや定性などが要因となり、述語句が「ある」の外側に生起している
のだと考えられるが、少なくともそれらのような何らかの外的要因が関わらない限り、
ガノ可変の「の」句は「ある」の内側に生起することが可能である、とということだけは
できよう。

さて、ガノ可変を真の例外とは見なさないとすれば、(47)だけが残るが、伴っている連
用成分は「社会的に」という副詞句であり、格成分ではない*7。従って、②Aにおいて
は、真に例外となる用例は見出されなかったことになる。

ここで、比較対象外とした用例のうち、[ある]と[名詞]の間に述語1つより多くの要素が生起している10例全てを見ておく。

- (60) 庄九郎は、その後、常在寺でぶらぶらすごしていたが、十日ばかりたった【ある】霧の深い朝、日護上人はふと、… (司馬遼太郎)
- (61) それから数週間が過ぎた、【ある】雨の降る日でした。 (宮本輝)
- (62) 今その人に自分が艶書を送るという事は【或】他の真面目な動機を持ってする一つの手段にしる、余りに不調和な、恐ろしい事のような気がした。(=20) (志賀直哉)
- (63) 宗吉は学資もなしに、無鉄砲に国を出て、行処のなさに、その頃、【或】一団の、取止めのない不体裁なその日ぐらしの人たちの世話に成って、辛うじて雨露を凌いでいた。 (泉鏡花)
- (64) それは【或る】十月のよく晴れた、しかし風のすこし強い日だった。 (堀辰雄)
- (65) 体の不自由なお子さんの母として、八年間闘いつづけてこられたことが(中略)、きっとあなたという人間に、何か【ある】大きな、強い、しかも以前よりもいっそうふくよかなものをもたらしたのに違いないと思いました。 (宮本輝)
- (66) ただそれらの体験のうちから、暗い時間の海に呑み込まれてしまわぬ部分、無意味のはてしれぬ繰り返しに陥没してしまわぬ部分、そういう小部分の連鎖から成る【或る】忌わしい不吉な絵が、形づくられつつあるのがわかった。 (三島由紀夫)
- (67) 太郎は、そう言って電話を切った。それから暫くの間、辰彦の事件を契機にした、【或る】水のような靄のような感慨にふけていた。 (曾野綾子)
- (68) 「葦王は泣いていましたよ。おれのようなものでも女房が貰えたってね」と、昭和十五年の二月中旬の【ある】ひどく寒い夜、松原の自宅に戻ってきた歐洲がひさに報告をした。 (北杜夫)
- (69) 僕には、モオツァルトという古今独歩の音楽家に課せられた【或る】単純で深刻な行為の問題だけが見える。 (小林秀雄)

これらの例は、ガノ可変の(60)(61)、それ以外の「の」句を含む(62)、連体形述語が主名詞に並立してかかる(63)–(67)、副詞句あるいは連用形述語が共起する(68)(69)と、いずれも格成分を含んでいないので(16)の例外とはならない。

最後に、(68)(69)について述べておく。この構造は、副詞あるいは連用形述語が複合して1つの述語となっているともみなせるが、それならば、「ある」は外側に生起しなければならないことになる。しかし、この構造では、以下に示すとおり「ある」が内側に生起する方が自然である。

- (70) ?ある若くて美しい婦人 / 若くて美しいある婦人

(71) (?)あるとてもまじめな男 / とてもまじめなある男

(格成分を含まずに) 述語句が長くなると、「ある」が内側に生起する方がやや自然になることが判る。しかし、ここで、外側に生起する場合も、極端に不自然にならないことに注意されたい。つまり、(68)(69)のように「ある」が述語の外側に生起することは、そもそも極端に不自然にならない構造なのである。これらの例は、述語のみの場合と格成分を伴う場合の中間的な振る舞いを見せている、とすることができる。

以上で、具体的な用例についての検証が終わった。調査結果とその検証により、(16)の一般化が実例の傾向としても明瞭に表れ、極めて例外の少ないものであることが明らかになった。(16)の一般化をもとにした、「ある」の統語的位置に関する主張は、実例の傾向により裏付けられたことになる。

4. おわりに

本稿の考察・検証により、「ある」が統語的に「あの」よりも低い(内側の)位置にあることが明らかになった。その基本的事実に加えて、検証の過程で見出されたガノ可変の振る舞いなど、日本語の名詞句の構造を考える上で有意義な記述を行えたと思う。

「ある」については、本稿で扱った統語論的問題だけでなく、意味論的・語用論の問題も残されている。そのような問題については、本稿で積み残した問題とともに、別稿で論じることになしたい。

注

- *1 連体詞「ある」についての研究は、統語論的なものに限らず、全般に少ない。用法の辞書的記述として比較的充実している森田(1989)、意味論的な素性を検討した金水(1986)が挙げられる程度である。
- *2 (1)-(4)のような非タ形のイ・ナ形容詞は、「以前はそうでなかった」という含意を非常に持ちにくく、その形容詞の表す属性がどの時点でのものか特定していない、つまり、時制を持たない、と考えるのが妥当である。(5)(6)はタ形の動詞であるが、過去のある時点において「太る」「変わる」という事態が生じた、という解釈を受けにくく、また、タをテイルに置き換えても意味が変わらない。これらの動詞は主名詞の属性を表すし、タ形であっても時制を持たないと考えるのが妥当である。
- *3 どのような構造までを句あるいは節と呼ぶかについては、議論に関係ないので定義しない。重要なのはAdjP/Cの区別である。
- *4 意味的要因により分布が著しく偏る「という」は比較対象外とした(「ある」1例、「あの」102例)。「という」には、固有名詞などを受ける場合と、節を受ける場合があるが、どちらも対象外とした。1例だけ見出された「ある」の例を挙げておく。
- a. またぞろ一月も経てば賞与式がやってくるという【ある】日 (北杜夫)
- *5 除外した例には、以下のように、「ある」と指示語「その」が共起する例も見られた。
- a. 始終何か更にしたいたい事、する筈の事があるように思っている。しかしそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物かが幻影の如くに浮んでも、捕捉することの出来ないうちに消えてしまう。(中略)そして花房はその分からない【或】物が何物だということを、強いて分からせようとしなかった。(森鷗外)
- 「ある」と指示語「この」「その」「あの」が共起する場合、例外なく、指示語が外側で「ある」が内

側であり、その逆はない。このことも「ある」が指示語より低いことの一つの証拠となるだろう。また、a. は Adj の内側に「或」が生起する(46)の例外だが、この例も含めた比較対象外の例については、本文で述べた通りその要因が複雑であると考えられるので、一部を除いて考察を保留する。

- *6 「あの」②には被修飾名詞の認定に問題のある用例が多数含まれている。例えば、
- a. それじゃあ、【あの】ホテルの中にある舞台で遣っていたのか (森鷗外)
- b. 【あの】西勝寺で彼と始めて会った時も、この肩に陽差しがあたっていた。(遠藤周作)
- のような例は、[[あのホテル]の中にある舞台][[あの西勝寺]で彼と始めて会った時]のように、隣接した名詞を被修飾名詞として捉えれば、考察対象から外れることになる。それに対し、表面的には構造が似ている以下の例には、そのような曖昧さが少ない。
- c. 【あの】玉をぐつと指で押しこんで、シューと泡の吹きあがるラムネを (三浦綾子)
- 「あの」②Aに属する用例には、多かれ少なかれ、このような認定の困難さが伴っている。従って、認定次第で割合は減少する。
- *7 この例の「ある」は「ある種の」に言い換えることが可能であり、「ある」が述語句より内側に生起することができない。「ある」は話し手にとっての特定対象を指示する場合が多いが、このタイプは、特定対象を指示しない。ガノ可変の(45)(43)も同様で、これらは主名詞が抽象名詞であり意味タイプが共通すると言える。このタイプは、そもそも意味的要因により生起位置が固定されている可能性があり、別に扱う必要があるかもしれない。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本語法論』大修館書店
- 神尾 昭雄 (1983) 「名詞句の構造」『講座現代の言語1 日本語の構造』(井上和子編, 第1章7節) 三省堂
- 金水 敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』明治書院
- (1994a) 「連体修飾の「～タ」について」(田窪行則編 1994 所収)
- (1994b) 「日本語のいわゆる N' 削除について」(第3回南山大学日本語教育・日本語学国際シンポジウム 報告書)
- 佐伯 哲夫 (1998) 『要説 日本文の語順』くろしお出版
- 島 千尋 (1993) 「現代日本語の「が/の」交替」について—主題文との関わりから—『言語学研究』12 (京都大学言語学研究会)
- 田窪 行則 (編) (1994) 『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- 成田 一 (1994) 「連体修飾節の構造的特性と言語処理」(田窪行則編 1994 所収)
- 益岡 隆志 (1994) 「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に—」(田窪行則編 1994 所収)
- 三宅 知宏 (1995) 「日本語の複合名詞句の構造—制限的/非制限的連体修飾構造をめぐって—」『現代日本語研究』2 (大阪大学)
- 森田 良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 山中 信彦 (1988) 「日本語の多義的な名詞修飾構造の解析」『言語学研究』94
- Kamio, Akio (1977) "Restrictive and Non-restrictive Relative Clauses in Japanese," *Descriptive and Applied Linguistics* vol. X, ICU
- Kitahara, Hisatsugu (1993) "Numeral Classifier Phrases Inside DP and the Specificity Effect," in Choi, S, ed. *Japanese/Korean Linguistics* vol. 3. CSLI
- Noguchi, Tohru (1997) "Two Types of Pronouns and Variable Binding," *Language* 73-4
- Oga, Kyoko (1997) "Pronouns in Japanese," 『言語学論叢』15・16 (筑波大学一般・応用言語学研究室)
- Whitman, John (1981) "The Internal Structure of NP in Verb Final Languages," *Chicago Linguistic Society* 17

テキスト

『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』(発行:新潮社/発売:NEC インターチャネル) 所収の、日本人作家による67作品全て。以下、作家名(五十音順)・作品名(文庫のタイトル)の順で示す。なお、本文および

び注で引用した作家には ‘*’ を付した。

*赤川次郎「女社長に乾杯!」、*阿川弘之「山本五十六」、*芥川龍之介「羅生門・鼻」、安部公房「砂の女」、有島武郎「小さき者へ・生まれ出づる悩み」、有吉佐和子「華岡青洲の妻」、池波正太郎「剣客商売」、*石川淳「焼跡のイエス・処女懐胎」、石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」、*石川達三「青春の蹉跎」、*泉鏡花「歌行燈・高野聖」、*五木寛之「風に吹かれて」、伊藤左千夫「野菊の墓」、*井上ひさし「ブンとフン」、*井上靖「あすなる物語」、井伏鱒二「黒い雨」、*遠藤周作「沈黙」、大江健三郎「死者の奮り・飼育」、*大岡昇平「野火」、開高健「パニック・裸の王様」、*梶井基次郎「檸檬」、川端康成「雪国」、*北杜夫「榆家の人びと」、*倉橋由美子「聖少女」、*小林秀雄「モオツァルト・無常という事」、沢木耕太郎「一瞬の夏」、椎名誠「新橋烏森口青春篇」、塩野七生「コンスタンティノーブルの陥落」、*志賀直哉「小僧の神様・城の崎にて」、司馬遼太郎「国盗り物語」、島崎藤村「破戒」、*曾野綾子「太郎物語」、高野悦子「二十歳の原点」、*竹山道雄「ビルマの竖琴」、太宰治「人間失格」、立原正秋「冬の旅」、*田辺聖子「新源氏物語」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、筒井康隆「エディプスの恋人」、*壺井栄「二十四の瞳」、中島敦「李陵・山月記」、*夏目漱石「こころ」、*新田次郎「孤高の人」、野坂昭如「火垂るの墓」、林芙美子「放浪記」、樋口一葉「にごりえ・たけくらべ」、福永武彦「草の花」、藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、*星新一「人民は弱し 官吏は強し」、*堀辰雄「風立ちぬ・美しい村」、*松本清張「点と線」、*三浦綾子「塩狩峠」、三浦哲郎「忍ぶ川」、三木清「人生論ノート」、*三島由紀夫「金閣寺」、水上勉「雁の寺・越前竹人形」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、*宮本輝「錦繡」、*武者小路実篤「友情」、*村上春樹「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」、*森鷗外「山椒大夫・高瀬舟」、柳田国男「遠野物語」、山本周五郎「さぶ」、山本有三「路傍の石」、吉村昭「戦艦武蔵」、吉行淳之介「砂の上の植物群」、渡辺淳一「花理み」

謝辞

本稿を成すにあたり、多くの方々には有益なコメントを頂いた。とりわけ、本学教官の矢澤真人先生と橋本修先生、院生の石田尊氏には、構想初期の段階から多くの御助言・御指導を頂いた。また、第44回関東日本語談話会(1999.5.15)において本稿とほぼ同じ内容のレジュメで発表した際、多くの方々、特に三宅知宏氏、林奈緒子氏、茂木俊伸氏には有益なコメントを頂いた。記して感謝申し上げます。

(まつもと てつや 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 言語学)